

巻 頭 言

今年、本県における「親子読書運動」が60周年を迎えています。この運動は、昭和34年に当時県立図書館長だった椋鳩十氏が、「母と子の20分間読書」として試行し、それを受けて、昭和35年から県が「親子20分読書運動」として推進して今日に至っています。本誌「さざなみ」の10号に当時この運動を推進するきっかけになった動機が書かれています。「同じ屋根の下に住んでいても親と子の心の隔たりは別世界の人のようだ。(中略) この心の隔たりをきめ細かく縮める方法はないだろうか。」といった文言です。つまり、読書によって親子の^{きずな}絆をつなぐことがこの運動の一つの目的です。

時を経て、平成30年12月に策定された、第4次鹿児島県子ども読書活動推進計画にも、「1冊の本をもとに親子で感じたことを語り合い、親子の^{きずな}絆を深める」ためにも家庭における読書が重要であることが書かれています。

このことから、時代は変わっても、親と子の^{きずな}絆を深めるための親子読書の必要性は変わらないことを伺い知ることができます。

さて、「2018 読書グループ調査」(公益社団法人 読書推進協議会)によりますと、鹿児島県の読書グループの総数は584団体となっており、この数は福岡、大阪、静岡、東京、愛知に次いで全国で6番目に多い数です。今年60年を迎える「親子読書」運動が、各地域に根ざし、脈々とその活動を継承する取組がなされてきた結果ではないかと考えます。

本誌「さざなみ」は、親子読書に関わるみなさんのために参考となる研修会の情報や子ども読書推進のための様々な取組、本県の読書推進活動の状況などをまとめ、県立図書館ホームページ上にも公開し、多くの方に御活用いただいております。

今後も「親子20分読書運動」の理念を大切に、本誌を活用していただきながら、親と子の、あるいは子ども同士のあたたかな交流を通して、豊かな読書の世界を子どもたちの中に広げていただければと考えます。

令和2年3月

鹿児島県立図書館長 原口 泉